HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	北海学園大学人文学会第３回大会シンポジウム記録 宗教について ： 「文化を学ぶ，世界と繋がる」
著者	佐藤，貴史
引用	北海学園大学人文論集(61)：57-64
発行日	2016-08-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

宗教について
──「文化を学ぶ，世界と繋がる」──*

佐　藤　貴　史

は じ め に

2013 年，土屋博先生の『宗教文化論の地平 ── 日本社会におけるキリスト教の可能性』（北海道大学出版局）が出版されました。その 1 年後，日本基督教学会の学会誌『日本の神学』に水垣渉先生による書評が掲載されました。そこで水垣先生は土屋先生の文章も引きながら，次のように書いています。

> 「宗教が現実には，「宗教文化」としてはじめて顕在化する」（297）のであり，「宗教自体が文化現象である」（35）から，宗教と文化を切り離して論じることはできない。また宗教を「論」じることもすでに文化であり，宗教「学」自体も文化の次元で機能せざるをえない以上，「宗教文化」は必然的な概念となる。

また，2015 年に出版された『日本の神学』には水垣先生の講演「聖書的伝統としてのキリスト教 ──「キリスト教とは何か」の問いをめぐって」が

---

* 本稿は北海学園大学人文学会第 3 回総会・大会「文化の諸相」での発題「宗教について ──「文化を学ぶ，世界と繋がる」」を文章化したものであるが，より詳細な議論や典拠などについては以下のテクストを参照いただければ幸いである。佐藤貴史「反省的／再帰的近代化と宗教」『人文学論集』第 60 号，2016 年。

掲載されています。水垣先生は，講演タイトルにも含まれている本質的問いに冒頭で次のように答えています。

> 「キリスト教とは何か」の問いに対して，私が提出しようとする答えは「聖書的伝統」である。これは誤解されやすい言葉であるが，キリスト教とは聖書に関係するありとあらゆる宗教的・歴史的諸事象を含む総括的な概念である，という意味で受け取っていただきたい。

水垣先生はこのような定義を踏まえたうえで，「ユダヤ教的･キリスト教的聖書的伝統の特質」として「翻訳」の特別な意義を強調します。

> 聖書はユダヤ教以来翻訳によってキリスト教に伝達され，キリスト教は聖書の翻訳を通して自己理解を解釈学的に展開し，聖書的伝統を拡張し深化させてきた。したがって聖書的伝統は，キリスト教にとって「宗教文化越境論」（土屋博）の典型を成す。ともかく聖書的伝統は最初から翻訳伝統であり，キリスト教は翻訳宗教であることを歴史的本質にしている。伝道，宣教もまさに翻訳の行為である。その意味で言語テクストに限られない（しかし言語論が中心になる）翻訳論はキリスト教の解釈学にとって不可欠である。

この引用のなかでは土屋先生の書物からとられた概念に言及されています。さらに，そこに付された注を読むと，土屋先生の書物から学べることは聖書的伝統を宗教文化という地平で問題にすることができ，「聖書的伝統を越境という，さまざまな歴史的，自然的，人為的，文化的なバリアーを超える精神的・意志的な運動としても」捉えることができる点にあると書かれています。土屋先生と水垣先生の議論からわかることは，文化の地平に現れる宗教は既存の境界線を越え，ときには公共的な意味を持つことで，人間の思考や活動に影響を与え続けているということです。

本発表では，第一に近代化と「宗教問題」，第二に近代世界と宗教の個人

化，第三に宗教をめぐる越境と翻訳の問題，そしてもし時間があれば最後に本発表の視点からみた人文学部のアドミッションポリシー「文化を学ぶ，世界と繋がる」の内実についても考えてみたいと思います。

１．「宗教問題」という亡霊

⑴　正当化するものから正当化されるものへ

20 世紀初頭，宗教社会学の黎明期のドイツにおいて「宗教問題」という言葉が頻繁に語られました。深澤英隆先生によれば，W. クネーヴェルスはその著書『ジンメルの宗教理論』のなかで宗教は二つの意味で問題（問い）になったと語ったといいます。第一に，人は宗教にどのように対峙すべきなのかという事実に，第二に宗教そのものが問題（問い）になってしまった，すなわち人は宗教の自明性が根本から疑われているような事態に直面しているということです。いずれにせよ，これまで自明であったキリスト教が近代社会における機能分化のプロセスのなかで，特権的な地位を失ってしまい，文化のなかの一領域に位置づけられてしまったことから生じた問題です。

また E. カッシーラーによれば，近代世界のなかで世界を正当化してきた神は正当化されるべき対象になったのであり，また学問の数だけ神の概念が構成されるという驚くべき事態が起きたのです。

宗教が文化の一領域になり，みずからを正当化しなければならなくなったこと，つまり宗教の文化的意義という問いの発生は同時に，宗教は問題であるがゆえに人間の反省の対象になったことを意味します。そして，実のところ，この議論は宗教にだけ関わるものではなく，近代化のプロセスをどのように理解するかという根本的な課題として現れたのです。

⑵　反省・再帰・リスク ── 近代化の二つのプロセス

いま述べた問題を，ドイツの社会学者 U. ベックは「反省的／再帰的近代化」という言葉で語っています。

ベックの議論の特徴は,近代を二つの段階に分けて論じていることです。彼によれば，まず「社会の近代化が進めば進むほど，行為の担い手（主体）は，みずからの存在の社会的諸条件に省察をくわえ，こうした省察によってその条件を変える能力を獲得していくように」なります。そして，この認識と反省のプロセスはやがてはみずからの伝統的な基礎づけをも反省し始め，価値の再構成をめざし，ときにはみずからの根拠を解体してしまいます。認識と反省はこれまでそうであったような行動を疑わしくし，人々に新たな決定と選択を迫っていくのです。

そして，この第一の近代化があまりに大きな成功をおさめたことが，ときに近現代世界に重大な悲劇をもたらしているのです。ベックは「近現代社会の近代化がより一層進展すれば進展するほど，工業社会の基盤はますます解体され，浪費され，変化をこうむり，危険にさらされていくという命題」について語り，それを第二の近代化とみなしています。しかも，第一の近代化との違いは，このような近代社会の第二のプロセスは「省察なしに，つまり，知識や意識が及ばないかたちで生じるという事実」にあります。自律した近代世界はみずから生み出した価値，技術，制度が不確実性としてみずからに降りかかってくる，つまり再帰してくるという状況に直面せざるをえないのであり，再帰する近代世界はみずからが生み出した〈意図せざる帰結〉との対決を避けることができないのです。

意図せざる帰結と直面する近代世界の問題を，ベックは「リスク」や「リスク社会」という言葉で示しています。近代世界が近代世界の問題となる事態を，ベックは際限のないリスクの増殖として描きます。しかも，リスクの増大は人々にみずからが向かうべき場所，地平線すら見えなくさせるとも指摘しています。

2．「宗教の事はどうお考えになるの」

(1)　宗教が宗教になるとき

「宗教の事はどうお考えになるの」という言葉は，ゲーテの『ファウスト』

のなかでグレートヒェンがファウストに向かって語る問いであり，ベックは現代世界のなかでこの言葉の意味を探ろうとしました。彼によれば，宗教共同体の弱体化や衰退という意味での世俗化論は「世俗化のパラドクス」をみていないといいます。

ヨーロッパでは宗教戦争を経て世俗に対する教会の権力が弱体化したことで，「科学の世俗的合理性」と「政治支配の現世的自己規定」が近代化の主要な要因として躍り出てきました。科学と政治支配は宗教から解放されたとみることができますが，これは裏を返せば宗教もまた科学と政治支配から解放されたのです。こうして宗教は，本来は果たしえない任務からしりぞき，「みずからの本来の仕事，すなわちスピリチュアルなものに専念できる」ようになったのです。

世俗化を強いられ，身軽になった宗教は「宗教以外の何ものでもないもの」になることができるようになりました。つまり，宗教が宗教になったのです。こうして宗教には人間のスピリチュアリティに奉仕するという本来の仕事に復帰する準備が整えられたのであり，逆説的にも世俗化は宗教の活性化の基礎を築いたのです。

とはいえ，世俗化のパラドクスのなかであらゆる宗教が活性化するチャンスを得たわけではありません。主として既存の制度的宗教，たとえば伝統的で教会的なキリスト教などは，少なくともヨーロッパにおいては従来の世俗化論にもっともしたがうように衰退していきました。これに対して，教会の外にあるような非伝統的な宗教セクトやきわめて個人的で非組織的なスピリチュアリティ運動などが衰えているとはけっしていえない状況にあることも事実です。

⑵　宗教の個人化

このような宗教における二つの方向性が生じるうえで，大きな役割を果たしたのが「宗教の個人化」の進展です。たとえば，キリスト教会 ── カトリックよりもプロテスタントに当てはまりますが ── には，もともと「信仰告白者の個人主義」という仕方で，個人化につながるような要素が組み

込まれていました。とはいえ，そもそも宗教の個人化とは実に矛盾したような響きを持っているとも，ベックはいいます。

彼によれば，宗教の個人化の現象は，みずからの足場を掘り崩していく再帰的近代化のなかで進んでいきました。不確実性の高まりに応じて広まっていく宗教的信仰の確保は，科学と政治から解放された宗教の仕事です。しかし，つねに変化していく近代世界のなかでは，制度化された宗教が提供する教義で人々は満足しなくなります。伝統の力が弱くなり，さまざまな領域で個人化が進む近代世界のなかで，宗教的シンボルの陳腐化のリスクを冒しながらも，人々は「「自分自身」の生と「自分自身」の経験的地平に合致する信仰物語，すなわち「自分自身」の神を作り出すようになっている」と書かれています。

⑶ 「自分自身の神」の発明

ベックによれば，「自分自身の神」が誕生する長いプロセスの起源はアウグスティヌス，デカルト，宗教改革にあります。そのなかでも彼はマルティン・ルターの宗教改革を，留保しながらも「個人化の革命」と呼んでいます。

ベックにとって，ルターは「個人と神を直接対面させることによって，「一なる」神と「自分自身の」神との結びつきのなかに主体的信仰の自由の根拠を求め」，既存の教会に反抗したのです。いまや「わたし」は信仰の確信の源泉であり，神と悪魔の対立はみずからの良心を戦場として戦われるとも書いています。

「自分自身の神」の独自性は二つあります。第一に，「個人が伝統的教会への結びつきとその権威から解放されている点」です。神と個人のあいだを仲介する代理人はもういないのです。

第二に，神の主観化は聖書の神と結びつかなければならなかったのですが，そのさい重要な役割を果たしたのが「テクストの直接性と神の直接性が一体化している神の啓示行為」に依拠しているということです。

テクスト（ドイツ語に翻訳された聖書）をどのように読むかによって，

個人はカトリックの教会教義から自由になるかもしれませんが，同時にもう一つのキリスト教（プロテスタント）に組み込まれていきます。その意味では，ルターは従来の境界線をずらしただけであり，撤廃することはできなかったともいえます。

このような既存の境界線を解体する宗教の個人化は現代世界におけるスピリチュアリティの議論とも結びつきますが，そもそも宗教には多様な境界線を越えていくグローバル・プレーヤーになる可能性が含まれていました。おそらくキリスト教には，そのような可能性がかなりの程度あったはずです。聖書を引用しときましょう ──「そこではもはや，ユダヤ人もギリシア人もなく，奴隷も自由な身分もなく，男も女もありません」（「ガラテヤの信徒への手紙」3.28）。

３．越境と翻訳の宗教文化論

⑴　宗教文化越境論の読み直し

ベックと同様に，土屋先生もまた「宗教運動は元来国境や文化的差異を越えて，自ら変化しつつ拡散していくものである」と書いています。このような宗教理解に基づいて，土屋先生は宗教文化論から宗教文化「越境」論へと歩を進めます。

冒頭でみましたように，水垣先生によればキリスト教は聖書の翻訳を通して聖書的伝統を伝えてきたのであり，聖書的伝統こそキリスト教における「宗教文化越境論」でした。くわえて，言語論が中心になるとはいえ，言語テクストに限られない翻訳論は「キリスト教の解釈学」とも呼ばれていました。このように水垣先生は，土屋先生の宗教（社会）学的な視点で語られた宗教文化越境論を解釈学的に読み直すことで〈宗教文化翻訳論〉を提案しているともいえます。さらにこのような議論は，ハーバーマスの宗教論にもみることができ，それは宗教文化越境論や宗教文化翻訳論にも通じる内容を持っています。

⑵　越境と翻訳の場としての「宗教的フロント」

ハーバーマスにとって，理性には宗教から学ばなければならない理由があります。多様な宗教的伝統のなかには，他の場所にはもはや存在しない何かがあるはずだともいいます。

また，「キリスト教とギリシアの形而上学の相互浸透」は哲学がキリスト教に影響を与えただけではなく，哲学もまたキリスト教からその内実を吸収したともいえます。ハーバーマスがあげるのは，神の似姿・神の像の思想が宗教と世俗の境界線を越え，人間の尊厳や人権へと翻訳されたと理解することができるという話です。これは宗教文化越境論の一例であり，さらには聖書的伝統がほとんどの無限の解釈を通して世俗的価値に結晶化していく宗教文化翻訳論の一例とも考えることができます。ハーバーマスはこれを「救済する翻訳」と呼んでいますが，この翻訳は「宗教的フロント」とも呼べる多様な場で生じていると思われます。

古代や中世はもちろん，とくに反省的／再帰的近代化の世界のなかで聖書的伝統が越境と翻訳のプロセスに巻き込まれていくとき，その状況を次のように分類することができると思いますが，もう時間がないので詳しい内容は避けたいと思います。

⑴外との出会いにおいてみずからを反省し，内なる自己理解へと向かっていく方向（そこには翻訳への抵抗も含まれる）

⑵内から外に向かってその内実が翻訳されていく方向，そして（2a）そこではみずからのコントロールによっては翻訳のプロセスを止めることはできず，何が再帰的にみずからに向かってくるかもわからない状況が生じる可能性

⑶内から外へ向かう翻訳なき越境によって近代世界そのものが予想外の困難に直面するという事態

これら三つの区別ですべてを論じることはできませんが，宗教が一つの文化になり，周りの諸文化・諸領域に影響を与えながら，宗教自体も変容していくという事態の一端が示されたのではないでしょうか。時間を超過していますので，これで発表を終えたいと思います。